

2 学期朝礼講話

おはようございます。

素晴らしい天気のもと、防災訓練が終わりました。

今日から2学期後半に入ります。1年間の後半と言ってもいいでしょう。3年生は進路決定の時期でしょう。2年生は部活動が佳境かと思います。1年生は高校生活というものになれてきたかと思います。

そうした中で、私は毎朝8時10分頃から10分間ほど校門で皆さんと挨拶をしています。

「おはようございます」と言った声が聞こえると、心の健康度は大丈夫だなと思います。声を掛けられて顔をそむける人、下を向く人を見ると、人と関わるのは嫌なのかな、何かタベ家族とうまくいかなかったのかなと思ったりします。朝の挨拶はそういった心の健康チェックにつながります。

もちろん、家庭でうまくいかない場合はよくあることだし、ただこれが継続されていると心配です。家庭的に大変なところに、こちらも無闇に介入するのは失礼にあたるかもしれないですが、そういう場合は学校に居場所を求めてほしいと思います。

皆さんの親御さんには、お子様を見守ってほしいという言い方をします。私自身も高校時代に親からあれこれ言われることに閉口した思いがあるからです。大学受験の際にも、〇〇学部はどうか、△△学部はどうかと、自分たちは大学に行っていないのに、色々と言われるのは違うのではないかと思ったりしました。自分は早く親から離れて大学生活を味わいたいと思っていました。

そうした家庭の重さは人にもよりますが、早く離れたくとも学校のお金や生活費はお世話になっているので無下にできないので、ジレンマを生み、ストレスを生みます。でも一番言えることは、寮生の皆さんもそうだと思いますが、親から離れて初めてありがたみがわかるということです。

もっと言えば、親が老後弱くなった時に初めて手をさしのべられるのかと言うことです。親が許せる時なのかなと思います。今現在対立ばかりしている方は、早く家を出て自活できるといいかなと思います。

これまで色々な親子を見てきました。そうした中で一番印象に残っている親子の話をしたいと思います。昭和から平成になる時に私は伊豆の東海岸の高校へ転勤しました。まだ20代後半の頃でした。次の年に3年生の担任になり、自分の部活動の生徒が私のクラスの一人となりました。彼は前年母親を亡くしていました。

確か6月だったと思います。その生徒は後輩と煙草を吸っていたことがわかり、生徒指導対象となり小会議室で自習していました。家庭に連絡して引き取ってもらうことになり、父親が迎えに来ました。父親は部屋に入ってくるや飛び蹴りをその生徒に行い、拳骨で殴り始めました。「お父さんを裏切って、この野郎、この野郎」と、ゼンマイ仕掛けのように手を振り回しました。私はあつけにとられて見ていました。何かドラマを見ているかのような科

感じで、慌てて他の先生が父親を静止させました。

あまりの父親の剣幕に驚きましたが、それ以上に生徒のことが心配になり、その夜家庭訪問することになりました。行ってみると生徒は玄関前に立たされていて、父親は私に家に入るように言われたので、生徒に声を掛けずに家に入りました。

父親は、「息子を許してほしい」と涙ながらに言い、私はただじっと聞いているのみで、何も言葉が出ませんでした。20代後半の若造でしたから、何も言えずに神妙に聞いていました。暴力がいいとは言いません。ただそこには子どもを思う父親の姿がありました。前年母親を亡くしていたことが、余計に子どもへの愛情を強めていたように思いました。

その後、色々な親子の姿を見てきましたが、あんな強烈なシーンに出会うことはありませんでした。でも子を思う父親の姿は目に焼きついています。

皆さんの中にも、家庭的に大変な方もいらっしゃると思いますが。こんな親子もあったんだよと記憶に留めていただければ幸いです。

以上で校長講話とします。

(令和7年 11 月 4 日、朝礼)